グレアム・グリーン全集—24

名誉領事

小田島雄志
訳

ノアム・グリーン全集

24

名誉領事

小田島雄志
訳

早川書房

THE HONORARY CONSUL

by Graham Greene
Copyright © 1973 by Graham Greene
Translated by Yusi Odasima
Published 1980 in Japan by
Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan by arrangement
with Laurence Pollinger Limited through
Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo.

グレアム・グリーン全集 24

〈検印廃止〉

名誉領事

著者 グレアム・グリーン
訳者 小田島雄志
発行者 早川 清
発行所 株式会社 早川書房
東京都千代田区神田多町二ノ二
郵便番号 一〇一
電話番号 東京(二五二)三一一一(大代表)
振替番号 東京・六-四七七九九
印刷 株式会社亨有堂印刷所
製本 大口製本印刷株式会社
発行日 昭和六十一年七月三十一日
再版発行
定価 一八〇〇円

乱丁・落丁本はお取替えいたします

ISBN4-15-200324-3 C0397

名

誉

領

事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

あらゆるものは
おたがいにまざりあう――
善は悪に、寛容は正義に、
宗教は政治に……

――トマス・ハーディ

この小説の人物は、イギリス大使からホセ老人にいたるまで、一人として実在の人物をモデルとはしていない。おもなる舞台となるアルゼンチンの地方と都市は、もちろん、現実の都市、現実の地方に似ている。それに名前をつけないでおいたのは、ある程度自由に変えたかったからであり、特定の都市の道路計画や特定の地方の地図に縛られたくなかったからである。

ヴィクトリア・オカンポに
愛をこめて、
また、サンイシドロと
マルデルプラタですごした
しあわせな数週間の
思い出のために。

第一部

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章

ドクター・エドゥワルド・ブラーはパラナ河の小さな港の、線路や黄色いクレーンのなかに立ち、対岸のチャコ地方の上に水平にたなびく羽毛のような煙を見つめていた。それは夕焼けの赤い縞のなかにあって国旗の線条のようであった。ドクター・ブラーはその時刻にたった一人でいるのに気がついた、あたりにいるのは海運会館の外に警備に立つ一人の水夫だけであった。それは、薄れゆく光となにものともわからぬ植物の匂いの一種不可思議な結びつきによって、あるものには幼時の意識と未来への希望を、またあるものにはすでに見失われほとんど忘れ去られたものへの意識を呼びさましてくれる、そういう夕暮であった。

線路と、クレーンと、海運会館と――それはドクター・ブラーがこの第二の故郷ではじめて目にしたものであった。それからの歳月はなにものをも変えてはいなかった、ただ、彼がはじめてここに着いたときにはなかったひとすじの煙がパラナ河の彼方にただよっているのが目新しいものであった。それを吐き出す工場は彼が母と北部共和国からきたときまだ建っていなかった。パラグアイから週一度の定期船でここにきたのはもう二十年以上前のことである。彼はアスンシオンの波止場の父を思い出した、小さな河船の短いタラップのそばに立ち、長身で白髪まじりで薄い胸をし、機械的な楽天主義の口調ですぐまたいっしょになると約束したときの父の姿を。一カ月後には――いやおそらく三カ月もすれば――その希望は父の喉で錆びついた機械のようにきしんだ。

父がその妻の額に、ベッドを共にするものと言うよりは母親にたいするような敬意をこめてキスしたのは、十四歳の少年にも、やや外国ふうとは思われたが、異様とは思えなかった。当時ドクター・ブラーは、父はあきらかにイギリス生まれだが、自分は母と同じくきっすいのスペイン人だと思っていた。父は、ただパスポートによるだけではなく当然の権利として、雪と霧におおわれた伝説の島、ディッケンズとコナン・ドイルの国の人間であった、たとえ十歳のときに離れた土地について正しい記憶をほとんどとど

めていなかったかもしれないけれど。父が乗船の直前にその両親に買ってもらった絵本がまだ残っていて――『ロンドン・パノラマ』という絵本だが――小さな息子エドゥワルドのためにヘンリー・プラーはよくそのくすんだ灰色の写真のページをめくってやったものだった。バッキンガム宮殿とか、ロンドン塔とか、二人乗り馬車や箱馬車やロング・スカートをつまんでいる淑女たちでいっぱいのオクスフォード通りとかがあった。父は、ドクター・プラーがずっとあとになって知ったことだが、亡命者であった。そしてここは亡命者の大陸であった――イタリア人や、チェック人や、ポーランド人や、ウェールズ人や、イギリス人の。ドクター・プラーは子供のころディッケンズを読んだとき、外国人が読むように、そこに書かれてあることはすべて現在もそのとおりだと思いこんでいた、ほかにたしかめる手段がなかったからである。たとえば執行吏や棺桶屋がいまも、オリヴァー・トウィストが地下室に閉じこめられている世界で、あい変わらずあくせくその仕事を続けていると信じこむロシア人と変わりはなかった。

十四歳の彼には、父が河にのぞむ古都の波止場にとどまる動機はわからなかった。ブエノスアイレスでかなりの歳月をへたのちようやく彼にも亡命者が生きていくのは単純ではないこと――うんざりするほどの書類やうんざりするほど役人のところに足をはこぶのが必要なこと――がわかってきた。単純に生きていけるのは、当然その国で生まれた人であり、生活の条件がいくら複雑怪奇であろうとそれがあたりまえだと思うことのできる人たちであった。スペイン語はローマ語から生まれたものであり、ローマ人は単純な人々であった。マチズモ――男の名誉――はスペイン語で美徳と同意語である。勇気とか堅忍不抜とかとはほとんど関係がない。おそらく彼の父は、外国人なりに男の名誉をまねようとして、パラグアイ国境の向う側で日ましに増大する危険にただ一人直面することを選んだのだろう、波止場で見せたものは堅忍不抜の表情だけであったが。

プラー少年と母が河の港に着いたのはいまとほとんど同じ夕暮どきであり、そこから南部のその共和国の騒々しい首都に行くところであった（彼らは政治デモのため出発が数時間遅らされていた）。そしてその場の風景――古い植民地ふうの家々、河沿いの通りのパン粉をまぶしたような化粧漆喰――ベンチで抱きあう恋人同士――月に照らされた裸婦の像とありふれたアイルランド人の名前をもつ提督の胸像――清涼飲料売場の上の大きな熟した果物のような外燈――といったもののなにかが、プラー少年の心にそれ

まで知らなかった平和の象徴として刻みこまれたので、のちになって、超高層ビルや、交通妨害や、パトロール・カーや救急車のサイレンや、馬にまたがる解放者の英雄的彫像などから逃げ出さずにはおられなくなったとき、ブエノスアイレスからきた資格のある医師という肩書をもって、この小さな北部の町にもどって仕事をする気になったのである。首都の友人や喫茶店での知りあいはだれ一人、彼の動機をわかろうとはしなかった。北部は暑くて湿気が多くて不健康なところだろうよ、とみんな口をそろえて言った、そしてその町ではなにも、暴力事件さえも、起こったことがないのだと。

「きっとおれの商売がここよりうまく成り立つぐらい不健康だろう」彼は微笑みながら答えた、それはまったく無意味な——あるいはごまかしの——微笑であった——父の希望の表情と同じように。

ブエノスアイレスで、長い別居生活のあいだに、父からきた手紙は一通だけであった。封筒には二人にあてて、「妻と息子（セニョーラ・エ・イホ）」と書いてあった。その手紙は投函されたものではなかった。アパートのドアの下に突っこんであったのである。それは二人がそこにきて四年ほどたったある日曜の夕方、映画館に行って三度目の『風と共に去りぬ』を見て帰ってきたときのことであった。母はリヴァイヴァル物をけっして見逃がさなかった、おそらく昔の映画、昔のスターを見ていると、数時間は内戦も危険のない静止したもののように思えるからだろう。クラーク・ゲーブルもヴィヴィアン・リーも、弾丸の飛び交うなかをくぐり抜けまた元気な姿を見せるのである。

封筒はひじょうに汚れてしわが寄っており、「直送依頼」と書かれてあった。だがだれが直送してくれたのか知るよしもなかった。手紙は、地（エスタンシア）所の名前がゴシック体で麗々しく印刷されてある彼らの昔使っていた便箋にではなく、線の入った安物のノートを引き破って書かれてあった。文章は、波止場での声と同じように、見せかけの希望に満ちていた——「事態」は間もなくおさまるはずだ、と父は書いていた。日付けは記されていなかった。だからその「希望」も、手紙で到着するずっと前に消えはててしまったかもしれない。父からの便りはその後二度となかった。投獄されたとか死んだとかの知らせも噂も彼らの耳には入ってこなかった。その手紙の最後には、スペイン式に、「この世でもっとも愛する二人が無事であることは大きな慰めである。愛する夫であり、父である、ヘンリー・プラー」とあった。

ドクター・プラーは、この河にのぞむ小さな港にもどろうと決意したとき、ここが自分の生まれた国の、そして父が眠る国の――監獄でか、墓地の下ではおそらく知りえないだろうが――国境近くで暮らしたいという思いにどれほど影響されたか、自分でもはっきりはわからなかった。あとはただ北東に二、三キロ車を飛ばし、河の湾曲しているそのむこうに目をやればよかった。そして密輸業者のようにカヌーに乗ればよかった……彼はときどき合図を待つ見張りのような気分に襲われた。もちろんもっと直接の動機もあった。あるとき彼はつきあっている女の一人に言った、「おれがブエノスアイレスを離れたのはおふくろからできるだけ遠くに行きたかったからだ」たしかに母はその美しさをどこかに置き忘れ、失われた地所のことを愚痴るようになっていた。なにしろ母が中年まで生き続けた地所とちがって、そこはぶざまにひろがるごたごたした大首都であり、安っぽい通りに出たらめにそびえたち二十階にわたってペプシコーラの広告がかけられた超高層ビルの目を驚かす建築のある都会であったから。

ドクター・プラーは港に背を向け、河の土堤沿いに夕暮の散歩を続けた。空はすでに暗くなり、羽毛のような煙を見分けることも対岸の土堤の稜線を見ることもできなくなっていた。その町とチャコを結ぶ渡し船のあかりが、重々しく南を目指す流れと戦いながら、光のともされた鉛筆でゆっくり波うつ斜線を引くように近づいてきていた。オリオンの「三人のマリア星」がちぎれたロザリオの残りのように空にかかっていた――十字架飾りを別のところに落としたまま。ドクター・プラーは、十年ごとに、これという理由もなく、イギリス人パスポートを更新してきたが、そのとき突然、スペイン人ではない話相手がほしいと思った。

その町には、彼の知るかぎり、ほかに二人しかイギリス人はいなかった、大学のなかをのぞいたこともないくせにドクターを自称する老英語教師と、名誉領事チャーリー・フォートナムである。何カ月か前の朝、チャーリー・フォートナムの妻と寝るようになってから、ドクター・プラーは領事といっしょにいるとどうも落ちつけなかった。素朴な罪の意識に悩まされたためかもしれない。妻の貞節を黙って信じているように見えるチャーリー・フォートナムの安心しきった態度にいらいらさせられたためかもしれない。彼は妻の妊娠初期のからだの不調について、心配そうにと言うよりは自慢げに、それが自分のあっぱれな腕前をたたえる賛歌でもあるかのように語るので、しまいにはドクター・プラーもあやうく「でもその父親はだれだと思います

?」と叫びそうになった。

もう一人、ドクター・ハンフリーズがいた……だがまだ早いので、彼の住んでいるホテル・ボリバルに行ってもあの老人は見つからないだろう。

ドクター・ブラーは河岸を照らす白い外燈の一つの下にベンチを見つけ、ポケットから本をとりだした。腰をおろしたところから、コカコーラ売場のそばに駐車してある彼の車がよく見えた。彼がもってきた本は、患者の一人ホルヘ・フリオ・サーベドラが書いた小説であった。サーベドラもドクターの称号をもっていたが、それは正式の学位であった。二十年前に首都で名誉博士の学位を受けていたのである。ドクター・サーベドラの処女作でありもっとも成功した作品であったその小説は『寡黙な心』という題で、男の名誉にあふれ重厚沈鬱な文体で書かれていた。

ドクター・ブラーは一度に二、三ページ以上は読みづらかった。ラテン・アメリカ文学の気高い寡黙な人物たちは、あまりに素朴、あまりに英雄的で、とうてい実在のモデルがあるとは思えなかった。南アメリカではルソーとシャトーブリアンがフロイトよりも大きな影響を与えていた――ブラジルにはバンジャマン・コンスタンの名をとった町まであった。彼は読みはじめた、「そのころ、風がたえまなく海から吹き、彼らの数へクタールの乾いた土地を塩からくし、その最後の風まで生き残ったわずかな植物をしぼませる日々を、フリオ・モレノは黙ったまま腰をおろし、顎を両手にのせ、まるで妻を締め出した心の隠された回廊にのみ生きていたいと望むかのように目を閉じていた。彼はけっして文句を言わなかった。妻は左手にマテ茶器をもって何分も彼のそばに立っていた。そしてフリオ・モレノは目を開けるとひとことも口をきかずに妻からマテ茶を受けとるのだった。ただいかめしい勝気な口のまわりの筋肉のゆるみが彼女には感謝の表情のように思われた」

父によってディッケンズとコナン・ドイルの作品で育てられたドクター・ブラーには、ドクター・ホルヘ・フリオ・サーベドラの小説は読みにくかった。しかし彼はそのつらい仕事も医者としての義務の一部と考えていた。数日後彼はホテル・ナシオナルでドクター・サーベドラと定例の食事をとることになっており、その本についてなにか意見をのべる用意をしておかなければならなかった。ドクター・サーベドラはそれに次のような心あたたまる献呈の辞を記してくれたのである。「私のよき友でありよき相談相手であるドクター・エドゥワルド・ブラーに贈る、この私の処女作が彼に私が必ずしもつねに政治的作家であるのでは

ないことを示し、親しい友になしうる唯一のこと、すなわち私のインスピレーションの最初の結実を味わっていただけることを期待しつつ」ドクター・サーベドラは実は寡黙にはほど遠い男であった。だがドクター・プラーは、彼が自分を理想化したのがモレノと考えているのではないかと思った。おそらく彼がモレノに自分のクリスチャン・ネームの一つを与えているのは無意味ではあるまい……

ドクター・プラーは、その町でほかのだれかがものを読んでいる姿を見かけたことはなかった。食事をしに外に出たとき目に入る本は湿気よけのガラスの奥に閉じこめられたものだけであった。河岸や町の広場などでなにか読んでいる人とふと出会うことはなかった——たまに地方新聞〈エル・リトラル〉を読む人がいるのを別にすれば。ベンチには恋人たちとか、買物かごをもつ疲れた女とか、浮浪者がいることはあったが、本を読むものはけっしていなかった。浮浪者は堂々とベンチをひとり占めしていた。浮浪者と同じベンチにすわりたがるものはだれもいなかったから、そこ以外の世界とはちがって、のびのびとからだをのばすことができたのである。

おそらく戸外の読書という習慣は、彼が父から受けついだものであった。父は畑に出るときも必ず本をたずさえた。そしてドクター・プラーは、いまは離れた生まれ故郷のオレンジの香りゆたかな大気のなかで、ディッケンズの全作品——『クリスマス物語集』以外の——を読破したのであった。彼が本を開いてベンチにすわっているのをはじめて見ると、みんな強い好奇のまなざしを向けたものだ。おそらくそれが外国の医者たちに特有の習慣だと思ったのだろう。それは男らしくないとは言えないが、たしかに外国ふうであった。ここの男たちは、街角に立ってしゃべるか、すわってコーヒーを飲みながらしゃべるか、窓から身をのり出してしゃべるかするほうが好きであった。そしてしゃべっているあいだじゅう、ある点を強調するために、あるいはただ友情を示すために、おたがいのからだにふれあった。ドクター・プラーは人前ではだれにもふれなかった、ただ本にふれるだけであった。それは、イギリス人のパスポートと同じように、彼がいつまでも他国者のままであることを思わせるしるしであった。彼はけっして完全に同化することはないだろう。

彼はまた読みはじめた。「妻自身、沈黙を破らぬまま働いた、つらい労働を、苦しい季節のように、自然の法則と受けとめていたのである」

ドクター・サーベドラは首都で批評家にも一般読者にも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.